

NO FENCE

vol. 64 2020年6月4



〒102-0093 千代田区平河町 1-5-7-203

nofenceinfo@gmail.com

<http://nofence.jp/>

北朝鮮内部の体制変革者の証言

第四回 金正恩を除去した後の北朝鮮の青写真

—金氏二代の悪の統治法の克服の後に—

『月間朝鮮』2019年8月号と9月号から

都希倫(ドヒュン)氏がSNSで2014年から2年間交信した北朝鮮内の革命組織の一員最氏のグループは、2004年から活動を始めていて、金正日亡きあと、金正恩を除去した後の北朝鮮社会をどのような国にするか、その青写真を示してくれた。連載2回目の昨年8月号に紹介されている。都希倫氏は北の対話者最理想(都希倫氏の命名)氏の写真を所望したのであるが、最氏が送ってきた写真は、彼らが目指す北朝鮮社会の青写真であった。彼のセンスは抜群である。

〈北の革命組織が描く新しい国の青写真〉

最氏語る、「我々の組織は、すでに存在した反独裁諸組織とは連関はない。」「我々の組織がやろうとしていることは、簡単である。今の金正恩政権は反人民的独裁政権であることを暴露し、人民のための自由で民主主義的な政権の確立のために〇〇〇〇が発足したことを全世界に知らせるために、革命機関紙を発刊するものである。

先ず革命機関紙〇〇〇〇は、

① 金日成、金正日、金正恩と続いている彼らの誇張された、華麗に作り上げられた(デッチ上げられた)歴史を、嘘で編まれた内容と真実の内容を、並行して連載して人民たちに知らせる。そして、彼らが超人間的な能力を持った神的な存在ではなく、普通の人間に過ぎず、今日では、金氏家門はこの土地の全ての物を所有する大地主であり、大独占財閥であり、大奴隸所有者として、プロレタリア独裁の一次打倒対象であり、民主主義の仇(かたき)であるという認識を人民が持つように、大衆を啓蒙する。

② 将来、このような歴史が繰り返されないような憲法を持つ民主主義国家を建てようと思う。そのために人民全てが我々の偉業に賛成し参加してくれるよう訴える。また将来打ち建てる国家が実施する諸般の民主改革の法令草案を公開す

る(▲身分制度の撤廃、▲旅行と居住地移動の自由、▲個人財産権の認定と市場活動の自由、▲無報酬強制労働制の撤廃と週40時間労働制、▲北と南の間の自由な移動と北と南の居住地選択の自由、▲政党創立と活動の自由、▲5年制義務軍事服務制の実行など)。

- ③このような民主主義の国家を打ち建てるために闘争する方法を知らせる(▲革命機関紙の内容を読んでみて、家族同士、友達同士、活動家同士、互いに討論し、意見などを交わす、▲合法的な方法で、独自なやり方で意見を表示し、各種の収奪と無報酬強制労働をサボタージュすること、▲独裁体制に同調する権力階層の非理を社会的に問題視する世論を喚起すること、▲将来の新しい生活は、誰かが持ってきて与えてくれるものではなく、我々が粘り強い努力と隠密な闘争を通して実現しなければならないこと)。

〈金日成・金正日・金正恩の私生活資料が必要〉

最氏語る、「このためには、金日成、金正日、金正恩の正確な履歴と彼らの私生活資料が必要。私はインターネットで資料を集めているが、それだけでは不足。またある資料は捏造されている。正確な資料だけが、北の人民たちを納得させ出る。」

〈青写真を読んだ訳者小川の感想〉

訳してみて、とても分かりやすく、感銘を受けた。この革命組織が10年間掛けて、研究して作り上げた青写真だけあるなという感想である。我々自由社会で当たり前のように出来ていることが、根底にある青写真であることが、この感想の根拠にある。

しかしこの9月号に北朝鮮当局(金一族の独裁体制)が如何に自国民が他国民と接触するのを禁じていたかの実例が最氏によって紹介されているのを再読してみて、この青写真の意味するところを、一層深く読み取らねばならぬことに気づいた。以下の実例を紹介し、国家保衛員の職務既定の酷さの最氏の紹介も翻訳し、金日成と金正日二代が作り上げた統治方法の残酷さを改めて確認し、上記の青写真と対比・対照させよう。

〈ある老兵親子の悲劇と国家保衛員の職務規定〉

最氏が語った実例は次のようなものである。「私は死んでもいい。ぜひ息子だけは生かしてください!」「2012年12月31日、その年も皆過ぎた最後の日に31歳の青年が吐いた言葉である。ある青年が2012年1月寒い冬にロシアの遠東地域に仕事にやってきた。彼がロシアの地にやってきたのには、ある事情があった。彼の父は6.25戦争の時、義勇軍として北朝鮮にやってきた。彼の父の故郷はソウルだ。ソウルには兄と父親、母親がいて、女の姉妹が二人いた。戦争前に姉妹たちは嫁に行き、家には両親と兄一人が住んでいた。16歳の時義勇軍に入隊した彼の父は、若い歳ではあったが、戦争でよく闘い、戦争が終わっても、復旧建設と社会主义建設で労力的偉勲を建て、いくつかの勲章とメダルを受けた戦争老兵であった。戦争によってソウルの家族と別れ、北で一人家庭を持って生活するようになった。彼の父は戦争が終われば、すぐにソウルの家族と一緒に生活しようとした。しかし彼の願いは60年がたつても実現することが出来ず、2010年分断と離別の苦痛を抱いたままこの世を去った。この世を去る前に、臨終の時、息子を呼んで座らせた父は、手紙一

通を取り出して与え、次の様に遺言した。

“〇〇や。私は到頭故郷へ行けなくなったなあ。統一がいつ出来るのか。今はお前のお爺さんとお婆さんは世を去ったであろう。叔母たちの消息は分からぬが、お前の叔父さんだけは、ソウルの私が住んでいた家で私を待っておられることだろう。私が義勇軍に入隊して家を出る日、お前のお婆さんが、私が戻るときまで家を移さず待っていると仰った。これが私が住んでいたソウルの住所だ。そしてこれが私がお婆さんに書いた手紙だ。私の兄はまだ生きておられると思うから、私の代わりにこの手紙を渡してくれ。世は移ったという話を聞いている。中国やロシアからも南朝鮮に自由に旅行もでき、手紙も交換でき、電話もできる社会になったという。世の人々は皆このように良く生きているのに、我々は手紙一通もやり取りする方法がない。最近ロシアに働きに行く労働者を選抜していると聞く。少しはお金を使ってでもそこに行くことはできないか。ロシアに行って、ソウルにある家に手紙を送ってくれ。そしてどうか気を付けてくれ。南朝鮮に手紙を送ったが、ばれてしまうと、全家族が滅びてしまう。私の故郷に連絡をするだけの事ではあるが、今世の中はどうなっているのか。このことが失敗したら、どんなことになるか。一歳の誕生を迎えた〇〇がかわいそうだな。”と言って、目を閉じることもできず南の空を見ながら、世を去った。〇〇とはこの父親が初めて見た息子の子であった。」

このあと老兵の息子は、父の指示通り、ロシアの伐採場に労働者として出かけ、ロシアからソウルに託された手紙を送る。しかし不幸なことにソウルの住所表示が昔のままだため、その手紙はロシアに戻ってきてしまい、伐採労働者を管理していた保衛員の手に渡ってしまった。仰天した保衛員は、その手紙を発送した老兵の息子を検挙して、さるぐつわをし、両手両足を縛り、病人に見せかけて平壌に送り、殺してしまう。その一歳の息子も。老兵の息子は一度は脱走するが、極寒のロシアでは凍死するので、再び保衛員の秘密拘留場に戻り、保衛員に自分の父が功労者であったことや、ソウルにいる自分の兄に出そうとした手紙の事情を話すのであるが、保衛員は一片の同情も示さず、この息子親子を殺してしまうのである(訳者小川のまとめ)。

最氏はこの後保衛員の服務規定を次のように紹介する。

「▲一つ、保衛員は偽装身分を持たなければならない。我が国を除外した世界の全ての国は、敵地(仇敵の地)である。身分は副社長、副支配人、副所長、副団長とする。▲二つ、保衛員は自分が担当する単位に、逮捕した者たちを拘禁することのできる秘密監房を持っていなければならない。▲三つ、保衛員は逮捕した者を監禁し、所持品を全て押収して、逃走することができないように、衣るものは下着だけにしておかなければならない。▲四つ、祖国までの護送は、逮捕した保衛員が責任を持ち、護送途中、犯人を逃走させた場合、逃走した者と同じく取り扱われる。▲五つ、護送方法は、犯人の二つの足、膝の関節を木と石膏繃帶で固定し、二つの足を使えないようにしておき、患者に偽装して運搬しなければならず、犯人が駐在国の言葉をよく使う場合、犯人の上の歯と下の歯を針金で固定し、護送途中飛行場や汽車駅で声を出せないようにしておかなければならない。最後に護送途中、駐在国の警察やUN団体のような検査機関にみつかれないように、注意しなければならない。」

先の老兵の息子が保衛員に捕まり、いったん逃亡し、凍死したら一歳の息子を見捨てことになると考え、秘密監房に戻り、保衛員に特別な事情であることを訴えた

が、一顧だにもらえたかったことは、前記した。その時の保衛員の回答を最氏は次のように記している。

「そのように功労を多く建てた親父が敵地に手紙を出す？これは祖国への反逆であり、敵地内通、スペイ罪に属する。敵地の仇敵どもと疎通することは、刑法60条に該当する祖国反逆罪であることがわからないのか！…お兄さん！お兄さん！敵地に住んでいたら、みんな仇敵だ。階級的な仇敵が別にいるとでもいうのか！兄というのが階級的な仇敵なのだ。その階級的仇敵と疎通しようとしたから、お前も今やこの視角から階級的仇敵であり、革命の仇敵だ！」と。

そしてこの回答を最氏は以下のように解説した。「保衛員にとって、老兵の息子は、自分と自分の家族全員を殺そうと挑（いど）んでくる許すことのできない仇敵であった。保衛員や老兵の息子が住んでいる国は、互いに仇敵になり、自分がお前を殺そうとしないのなら、お前が私を殺すことになる、そのような環境であった。互いに監視し、疾視して、お前を殺せば、自分が生きる環境の中で、ひとえに、一人だけが限りなく慈愛に満ちた微笑と温かい愛、海と同じような包容力のある仁者のような度量で万民を一つの胸に抱き、本当の父の様な心情で面倒を見てくださっている。我々が抱かれて生きる世界の、二つとない、限りなく有難い我々の制度を、守って下さっている。そして、28歳のその方（注：金正恩）は、千万軍民の尽きない尊敬と欽慕を今日も受けているのだ。このような世界で二つとない人権不毛の死角地帯を作り、人民たちにい抱かせているが、それでも千万人民の頭の上に座っていることのできるのは、この土地を統治するよく作った統治プログラムのお蔭だ。あらゆる幸福は私が作って与え、あらゆる悪は他人が作る、と言って互いに鬭うときに、それを眺め、限りなく仁者のような笑いをしてみせることのできる環境だ。根の深い歴史を持つ、その悪の統治プログラムは、祖父の時から作られ、父の時に来て、よく仕上げられて完成し、孫にまで引き継げて、このような悪を作り出したのである。」と。

このような悪の統治プログラム（保衛員服務規則を見よ！）を作り出したのは、金日成であるのに、その上に仁者のようににこやかに座っている。これが最氏たちが描いた50年も続く金氏独裁制度の構造である。最氏は保衛員のような仕事をしていた前史がある。この後悔から、革命組織の一員になり、上記のような青写真を作り、現在の北社会の残酷な悪の統治技術を活写して、西側世界に暴露し、訴えたのである。息子をも殺す残酷な連座制に涙を流しつつ（文責、小川 晴久）。

北朝鮮内部の体制変革者の証言録(最終回)

第五回 北の証言者の紹介

北の証言者の年令は、南の対話者の都希倫(ドヒン)氏(1967年生)が「北の弟」と書いているので、50歳前後です。一人優秀な息子がいます(いました)。そして彼の生き方に深く刻まれたお父さんが対話録に2回出てきます。この対話録の中で、彼は防衛上殆んど自分を語りません。しかし、その中でも時々彼は少し自分を語ります。最終回として、2~3のエピソードと北が対南工作のテレビ『わが民族同士』2017年6月に紹介した彼の目元をばかした上半身の写真を彼と判断して紹介します。彼が北当局によって逮捕された時のものと思われます。北提供の写真です。

〈父の教え〉 彼が17歳のとき、軍隊入隊2~3か月前のこと。お父さんに呼び出されて「お前は何歳まで生きられると考えているか」と問われた。そんなこと考えたことはありませんと答えると、今考えて見ろと言われ、70歳位と答えた。自信を持って言えるかと問われて、では65歳までなら自信を持って生きますと答えた。すると父は「今まで良く生きたと思ったときはないか」と言われ、「昨日死ぬ日だったが、今日も一日超過して生きていると考えるようにしなさい」と言われ、「私がなぜまだ若いお前にこんなことをいうかと言えば、人は何歳まで必ず生きるといつもそんなことを考えていると、自然に怖いことが増える。計画した日まで生きた人は多くはないので。」という話。「しかし、今寿命を超過して生きていると、大胆になれる。だからいつまでは生きなければという考えは捨てなさい」と仰ったのです(2020年『月間朝鮮』4月号最終回)。「父は考えていたことの40%は達成できた。成功した人生であったと仰っていました。」(同上)。

「父は有名な功勳俳優であった。小さいころ母に連れられて沢山の俳優さんたちに会った。」(2019年11月号第5回目)。

〈彼の写真〉上記したように2017年6月北当局は「特大型国家テロ犯罪の真相」と題して彼と思しき人物を『わが民族同士』で紹介している。下に掲げる写真である(『月間朝鮮』2019年6月号所載)。目元はばかしているが、顔立ちは引き締まっていて、さすが俳優の息子だなあと感じた。

〈南北統一した暁に、南半部を自転車旅行したい〉

とても印象に残る発言だ。南北が統一したら、南を自転車で隈(くま)なく旅行したい。自動車ではなく、自転車で、と(2020年3月号、第9回目)。

〈本当の共産主義は民主主義だ〉

今一つ印象に残る彼の言葉は、本当の共産主義は民主主義だと語ったこと。都希倫氏がすかさず、北は封建主義ですからねと答えた。前回の第四回目で紹介した彼らが目指した北の青写真によく合う言葉だ(同上)。

〈彼は化学工学を専攻。数理に強い息子〉

彼が終始論理的に考える人物であることに都希倫氏はいつも感心していた。都希倫氏がハッカーのことを質問したので、最終回で北におけるハッカー養成の実態を詳しく証言し、16～7歳になっている自分の息子もその一人であることを告白している。自分の命は明日まででもいいが、息子だけは生かしたいと、都希倫氏に託した。その息子も今生きているかわからない。金日成が作った連座罪法に強く憤り、悲しんだ彼であった。

終りに、都希倫氏にも深く感謝したい。北の弟との出会い、そして2年間の毎日のようなSNSによる対話、北の革命家集団が世界にアピールしたい内容をよくぞ記録して紹介して下さった。北の弟はこの証言録で永遠に生きる。『月間朝鮮』誌にも感謝。

2020年6月9日 東京にて小川晴久識す。



北の証言者(都氏)



都希倫氏
トヒュン